

山寺通信

鶏谷山花栄寺だより

今号の記事:

- 謹賀新年
- こどもらの歓声響く
- 沖縄慰霊旅行記

謹賀新年

皆様におかれましてはつつがなく新年をお迎えになられたことと心よりお喜び申し上げます。昨年は晋山結制に全力を注いだ一年でしたが、一昨年の開創500年記念法要から二年続きの大事業にもかかわらず檀信徒各位のご理解とご支援を賜り、盛大裡に儀式を終えることができました。あらためて感謝申し上げます。

さて、先般お配りした記念誌で裏山の遊歩道を紹介いたしました。この遊歩道は西国三十三観音巡礼を遙拝するために明治20年代に作られたものです。沿道に祀られた33体の観音像は、近畿地方に点在する西国三十三観音霊場の観音様に対応しています。巡礼に出かけることができなくとも花栄寺の遊歩道を歩きながらご当地を巡るのと同じ功德があるようにと設備されたものだそうです。ここは近年まで年に数回の清掃活動が行われていましたが、残念ながら時代の変遷の中でマンパワーが失われ維持しきれなくなっておりまして。しかし、せつかく先人か



刈った枝を粉碎機に入れてチップにしている



下草刈りをした花栄寺の山の朝

ら伝わったものが途絶えてしまうのは申し訳ないと思い、数年前に有志の皆さんから下草刈りを行って頂いたところ、里山の景色を取り戻すきっかけができたのでした。

そして現在「地球温暖化防止緑づくり事業」として、さらに裏山整備をすすめています（主催「NPO法人柏崎森づくりネットワーク」）。昨年は遊歩道の沿道整備を目標に8月31日、9月7日、10月19日、11月9日、11月17日の5回にわたり、倒木除去、間伐、下草刈り払いなどを行いました。作業前は鬱蒼としていた遊歩道が、木漏れ日が差し込み気持ちよく歩くことのできる小道になり、秋の作業の時には美しい紅葉の元でコーヒーや石焼き芋を味わうひと時を楽しみました。多くの人に知って頂きたいと思い、ここに報告する次第です。

花栄寺の魅力は、この木沢という土地に根を下ろしていることから生まれてきます。この場所でなければできないことに着目して、これからも持っている特質を磨き活かして参ります。

最後に、一年の御健勝をご祈念申し上げますとさせていただきます。

こどもらの歓声響く



裏山を越えると雪原が広がる

去る2/17(日)、6/23(日)、6/30(日)、8/5(月)～7(水)、運動あそび塾「しらさん家」のこどもたちがお寺体験に来山しました。冬は裏山に広がる雪原地帯でうどんを作ったり雪遊びをしたり自然の中で満喫し、夏はお寺修行体験で坐禅をしました・・・が、やっぱり体を動かして遊ぶ方が楽しい！そんな元気な子供たちでした。また10/3(木)は新道小学校の5、6年生が校区内遠足で来山しました。同じ新道小学校校区でも初めて野田地区に来る参加者は、お寺の景色に眼を輝かせていました。

写真右:三十三観音遊歩道を探検して何かを探しあてた模様



写真左:小さい仲間と坐禅体験



沖縄慰霊旅行記

11/25(月)～28(木)、県内曹洞宗寺院の方丈様方と沖縄県に行って参りました。参加者80名を超える旅行団でした。第二次世界大戦の激戦地であり、今もまだ米軍基地問題で揺れる地の哀しみと人々のエネルギーを直に感じ取ってきた旅でありました。とくに糸満市にある摩文仁の丘平和記念公園で、20万人の戦死者名を刻んだ石碑が延々と立ち並ぶ公園に立った時は、その地に立たなければ決して知ることのない感覚を味わいました。青い空に微風がそよぎ、さざ波揺れる今日の沖縄に、かつて鉄の暴風雨が降り注いだのだということを肌を感じ、戦慄を覚えました。バスガイドさんが「ざわわ、ざわわ」で有名な『サトウキビ畑』の作詞者寺島尚彦さんの言葉を紹介して下さったのが、印象的でした。それは、「この歌は、反戦歌という捉え方をすると掬いきれない想いがある。ざわわという響きに込めたのは、むしろ鎮魂なのだ」という言葉でした。自分の一歩もまた鎮魂の一歩なのだ、と念じ念じて歩いた数日間の旅行でした。生きとし生けるものが皆幸せでありますように。

写真上:普天間基地滑走路にオスプレイが並んでいた 写真中:摩文仁の丘に広がる戦没者名碑(参考写真) 写真下:平和記念公園の慰霊法要記念撮影